

日本語中上級総合教材開発と改訂

— 短期留学生特有の課題達成に向けて —

内 藤 真理子・小 森 万里
高 橋 旬 子・辻 恵 子

要 旨

立命館大学では短期留学生受け入れプログラムを実施しているが、短期留学生が満足する授業を提供するためには、1) 短期間での日本語能力向上と日本文化・社会体験という2つの目的の達成、2) 上達感の獲得、3) 学習意欲の維持、4) 自主的学習への橋渡しという4つの課題を達成することが重要である。

本稿では、4つの課題達成に焦点を当て、市販の中上級総合教材を分析した上で、筆者らが行った教材開発の過程と、評価を基にした改訂について述べた。教材評価においては、アンケート調査などの量的データとインタビュー調査などの質的データを収集し、分析を行ったところ、本教材の初版で4つの課題全てが概ね達成できていることが分かった。さらに、課題達成強化を図るために、それらのデータを基に改訂と評価を繰り返し行った結果、より学習者の満足度を高めるのに効果的な教材に改訂することができた。

キーワード

日本語、短期留学生、中上級、教材分析、教材開発、量的データ、質的データ、改訂

0. はじめに

立命館大学では、1988年から短期留学生受け入れプログラムを開始し、現在は「Study in Kyoto Program」(以下「SKP」)として実施している。受け入れ期間は半年ないし1年で、入門～上級までの6レベルに分け、日本語の授業を提供している。各クラスの教材はSKP生に合わせて担当教師が選ぶが、短期留学生の特徴と課題があるために、中級以上でその選定が困難な場合が多い。

本稿は、筆者らが担当した中上級に焦点を当て、ガニエ・他(2007)のInstructional Systems Design¹⁾に基づいた教材開発について述べたものである。1章では短期留学生の特徴と課題を明らかにし、2章で市販の中上級総合教材がそれらの課題をどの程度達成できるかを調べる。また、3章と4章では短期留学生の課題を達成するために筆者らが行った教材の開発と、その評価と改訂の過程について述べる。

1. 短期留学生の特徴と課題

短期留学生（以下「学習者」）の特徴と彼らへの日本語教育の課題とは何であろうか。2008年度前期末と2009年度前期末に中上級のSKP生から収集した授業・教材についての意見・感想（以下「学生の声」）や、担当教師間での意見交換や先行研究から、主に次の4つの特徴と課題が明らかとなった。

第1に学習者は短期間で2つの目的（日本語能力の向上と日本での文化・社会体験）の達成のために来日していることである。学生の声では「漢字は自分で勉強できるので、授業では難しい漢字の書き方や覚え方だけでよい」「90分作文だけというのはもったいない」など授業時間を有効に使いたいと望んでいることに加え、「日本のことや現代の問題などをテーマとして取り上げると面白いと思う」など日本語だけではなく日本文化や現代社会をテーマとして授業で取り上げることが求められる意見がみられた。このことは長谷川・奥村（2007）や横田（2008）による、学習者は日本語、日本文化、日本社会への興味といった明確で積極的な理由をもって来日しているとの調査結果からもわかる。そのため、短期留学プログラムを成功させるには、限られた時間の中でこの2つの目的を達成し、満足させることが必要である。

第2に派遣元の大学で、日本語を勉強しているものの、既習学習項目を状況に合わせて使用できるレベル、つまり運用できるレベルに至っていない場合が多いことである。そのため、レベル分けて学習者本人が思っているよりも下のレベルに配置されることがある。その結果、孫・山本（2009）でも述べられているように、既に習ったことばかりだから役に立たなかったなどといった不満が学習者から出やすい。担当教師間の意見交換でも同様の報告があった。また、学生の声では「文法ばかりで会話は上手にならなかった」「習った日本語を使う状況を与えて欲しかった」などがあり、口頭表現力を中心とする運用力の強化が上達を実感するための基準となっていることがうかがえる。したがって、学習者が上達感を得られるように、話す力をつけるといった運用力の涵養にも重点をおいて授業を行うことが必要である。

第3にそれぞれの学習者が派遣元で受けてきた日本語教育の内容や専門分野が異なるため、学習者間で学習背景や興味、知識に差異があることである。学習項目に大きな違いがない初級とは異なり、特に中級以上の学習者間では、それまでの日本語の授業で学習してきた内容に違いがある。そのため、全員にとって未習であり、かつレベルに合った文法や語彙を扱うことや、全員が興味を持てる話題だけを取り上げることが難しい。学生の声でも「接続詞・副詞が役に立った」「題材は面白かった」などの肯定的な感想がある一方で、「たくさんの文型が消化しきれず混乱した」「題材に興味の持てないものがあつた」など、否定的な感想もみられた。このように、限られた時間の中で効率よく学びたいと考えている学習者から授業に対して否定的な評価が出やすく、上達感を得られないことから自身の学習意欲さえ減退させてしまう恐れがある。富坂（2007）は、帰国前1ヶ月の時点で自分の上達度に満足している学習者は少数であり、「強い動機付けを持っていること、高い学習目標を絶えず持ち続けることが環境のいかにかわらず学習に成功する原動力となる」（p.146）としている。いかに学習者が興味を持てる内容を取り上げ、学習意欲を維持させるかが重要である。

第4に、自分に合った学習方法を見つけ、自主的に勉強する習慣を身につける必要があること

である。学生の声では、「(主教材の) 文法説明が短く教師の説明がないと難しい」「例文はときどきわかりにくい」といった感想がみられ、教材を選ぶときに学習者自身で予習復習できるかを考慮する必要があることや、復習用の副教材についても「先生のチェックがないのであまり使わなかった」という意見があることから、自主的に学習できていなかったことがわかった。

また、帰国後そのまま卒業してしまう場合や、派遣元の大学に上級レベルの授業がないために、日本語の学習が続けられない学習者が少なからずいる。帰国予定の中上級修了 SKP 生を対象に 2011 年度前・後期にアンケート調査を実施した結果、帰国後自分のレベルに合った日本語の授業を受けることができないと答えた SKP 生が、それぞれ有効回答数 8 名中 (有効回答率 80%) 5 名、4 名 (同 100%) 中 3 名であった。このようなことから、留学中に自主的に学習する習慣を身につけ、帰国後も継続して学習 (以下、「自主的学習」) できるような橋渡しとなる日本語教育が求められるといえる。

以上、学習者への日本語教育の課題として 1) 短期間での 2 つの目的 (日本語能力の向上と日本での文化・社会体験) の達成、2) 上達感の獲得、3) 学習意欲の維持、4) 自主的学習への橋渡しの 4 つがあることについて述べた。

2. 中上級総合教材の比較

本章では、市販の中上級総合教材を比較、分析し、前章で述べた学習者特有の課題をどの程度達成できるのかについて述べる。

2.1 調査対象教材

日本語教材リスト編集委員会の『日本語教材リスト 2010-2011』で「中上級」「中級～上級」と記載されている 8 冊の日本語総合教材を選び、調査した。

- ①『文化中級日本語Ⅱ』1997 年 (以下『文化Ⅱ』)
- ②『中級から上級への日本語』1998 年 (以下『中級から』)
- ③『中・上級日本語教科書 日本への招待』2001 年 (以下『招待』)
- ④『日本語中級 J501—中級から上級へ—』2001 年 (以下『J501』)
- ⑤『ニューアプローチ中上級日本語 (完成編)』2002 年 (以下『ニュー』)
- ⑥『日本語 5 つのとびら—中上級編』2008 年 (以下『とびら』)
- ⑦『中級を学ぼう 日本語の文型と表現 82』2009 年 (以下『学ぼう』)
- ⑧『「大学生」になるための日本語 2』2010 年 (以下『大学生』)

2.2 第 1 課題「短期間での日本語能力向上と日本文化・社会体験の達成」のための教材

まず、第 1 課題の達成が可能な教材であるかをみるため、どのような題材が本文に選定されているのかを調べた。1 章で述べたとおり、日本語、日本文化、日本社会、現代社会に関する題材を選ぶことが課題解決につながると考えたためである。

その結果、『大学生』以外の 7 冊は、日本社会や現代社会を扱った本文が選ばれており、中でも『文化Ⅱ』と『J501』は現代社会に加え、言語、文化など第 1 課題の達成に役立つ本文が入っ

ていることがわかった。

2.3 第2課題「上達感の獲得」のための教材

次に、第2課題の達成が可能であるかをみるため、課の構造、本文（自然さ、本文数、本文の種類）、文法・語彙練習を調べた。

2.3.1 課の構造

上達感を得るためには、どのように運用力をつけるかが重要である。学習者にとっては「聞く・話す」のコミュニケーション力の向上が最大の関心事であり、上達感を得るポイントである（富坂 2007、孫・山本 2009）といえる。このことは、1章で述べた学生の声で、聴解力がついたことや話せるようになったことを理由に「上達した実感があり楽しかった」と述べられていることからわかる。

そこで、国際交流基金（2008）で示されている構造分析の方法を参考に各教材の課の構造図を作成し、運用力を伸ばす構造になっているかを分析したところ、次の3つの型に分けられた。

統合型：各課の終わりに、その課の学習項目を使って総合的に運用する活動を組み込んだ構造となっている。『文化Ⅱ』『招待』『とびら』『大学生』がこれにあたる。

発展型：各課の終わりに、その課の学習項目を発展させた活動（学習項目を使う練習ではない）を組み込んだ構造となっている。統合型ほど、課の学習項目との関連性は高くない。『ニュー』『学ぼう』がこれにあたる。

個別型：各課の学習項目が独立している。特に統合、発展させるような活動は組み込まれていない。『中級から』『J501』²⁾がこれにあたる。

統合型は、各課で新しく学んだことを産出するだけでなく、その産出が適切だったかを、他者の反応をみながらモニターできる場を総合練習で提供することができる。発展型は発展練習で運用力を養えるのが特徴であり、個別型は教師が学習者に合わせて適宜別教材で補い、総合練習や発展練習を組み込むことができるのが特徴である。ただし、時間的制約のある学習者には、発展練習の時間を確保することが難しい場合もある。

したがって、課の構造の観点からは、統合型の『文化Ⅱ』『招待』『とびら』『大学生』が第2課題を達成できているといえる。

2.3.2 本文

初中級の教材は学習者用に平易な日本語で理路整然とした文章にリライトされている場合が多いが、学習者の最終目標はリライトされていない一般の文章（以下「生の文章」）が読めることである。必ずしも規範的に書かれた文章ではないものにも慣れていくことが、上達感につながると考えられるため、各教材にどのような本文がどのくらい入っているのか（本文の自然さ、本文数、本文の種類）を調べた（表1）。

本文の自然さについては、8冊のうち、『中級から』『招待』『J501』『大学生』において生の文章や、リライトされた文章³⁾が全体の93～100%を占めていた。

また、各教材の本文数を調べたところ、『招待』が29と最も多く、次いで『文化Ⅱ』が16であった。その他の教材の本文数は8～12であった。多読によって文法力、読解力、リスニング力が上がったという研究もある（黛・神田・畑中 2006）ことから、本文数の多いことが上達感

につながると考えられるため、この2冊は第2課題を達成できる要素があるといえる。

さらに、本文で多様な種類の文章（多様な文章の型）を読むことができれば、それが上達感を得ることにつながると考え、各教材にどのような種類の文章が本文として使われているかを調べた（表2）。最も種類が多かった教材は『招待』であり、説明文、意見文、記録報告文⁴⁾、エッセイ、小説・物語、その他（インタビュー記事、宣言文、箇条書き）の8種類であった。次いで種類が多かった教材は『文化Ⅱ』で、説明文、意見文、事実文、記録報告文、その他（ミニコミ誌記事、手紙、スピーチ原稿）の7種類であった。

したがって、本文の比較では、8冊の本文の中では量も種類も多く、生の文章に近い『招待』が最も第2課題を達成できるといえる。

表1 本文の自然さと本文数

%(本文数)

	文化Ⅱ	中級から	招待	J501	ニュー	とびら	学ぼう	大学生
生	18.8(3)	100.0(10)	93.1(27)	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)	100.0(9)
リライト	31.3(5)	0(0)	3.4(1)	100.0(10)	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)
書き下ろし	50.0(8)	0(0)	3.4(1)	0(0)	100(10)	100.0(8)	100.0(10)	0(0)
本文数	16	10	29	10	10	8	10	9

表2 文章の種類

%(本文数)

	文化Ⅱ	中級から	招待	J501	ニュー	とびら	学ぼう	大学生
説明文	50.0(8)	40.0(4)	※13.8(4)	20.0(2)	60.0(6)	12.5(1)	50.0(5)	44.5(4)
意見文	18.8(3)	40.0(4)	※34.5(10)	30.0(3)	30.0(3)	87.5(7)	30.0(3)	0(0)
事実文	6.3(1)	10.0(1)	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)
記録報告文	6.3(1)	0(0)	※34.5(10)	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)	11.1(1)
エッセイ	0(0)	10.0(1)	6.9(2)	40.0(4)	10.0(1)	0(0)	0(0)	22.2(2)
小説・物語文	0(0)	0(0)	6.9(2)	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)	22.2(2)
詩	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)
その他	18.8(3)	0(0)	10.3(3)	10.0(1)	0(0)	0(0)	20.0(2)	0(0)
異なり種類数	7	4	8	4	3	2	4	4

※1つの本文に説明文、意見文、記録報告文の3種類が入っている場合、3と数えている

2.3.3 文法練習

学習者にとって、時間的制約の中でいかに効率よく新しい文法項目を学び、運用力をつけられるかが重要である。そこで、各課で学んだ文型・表現を運用力に結びつけるような練習が組み込まれているかを調べた。

工夫がみられたのは、『とびら』『学ぼう』『大学生』の3冊である。『とびら』は、日本語でレポートを書くために必要な文法項目が挙げられ、短文レベルの練習にとどまらず、本文の内容に関する表現練習（作文）が入っている。『学ぼう』は、新出の文型・表現を使って、読む、書く、聞く、話すという、4技能を使った運用練習ができるようになっている。『大学生』は、具体的な状況の中での新出文型・表現の使い方が練習できるように工夫されている。

したがって、文法練習の観点からは『とびら』『学ぼう』『大学生』が第2課題を達成できるといえる。

2.3.4 語彙練習

次に、語彙の運用力をつけるような練習があるかを調べた。その結果、語彙練習がある教材は『中級から』『J501』『とびら』『学ぼう』の4冊であった。

『中級から』『学ぼう』は、言葉の意味を説明する問題、選択問題、共起する助詞を尋ねる問題など、多様な語彙練習を通して運用力を養う練習となっている。『J501』は関連語彙を増やしたり造語力をつけたりする練習によって、未知の語彙に出会ったときの対処ができるようになっている。『とびら』は、意味、統語、音韻、字形の観点から漢字・語彙のまとまりを提示し、まとまりごとに効果的に学べるように配慮されている。4冊とも新出語を覚えるだけでなく、いかに上達感を与えていくかが工夫されている。

以上、構造、本文、文法練習、語彙練習の観点から、第2課題が達成できる教材がどれかを見てきた。4つの観点全てを満たす教材はないが、課の構造と本文の観点からは『招待』が、文法練習と語彙練習の観点からは『とびら』『学ぼう』が第2課題を達成できるといえる。

2.4 第3課題「学習意欲の維持」のための教材

第3課題の達成が可能であるかをみるため、学習目標が明示されているかを調べた。また、前節で言及した本文の自然さ、本文の種類が第3課題にどのように影響しているかを検討した。

2.4.1 学習目標の明示

課の初めに学習目標を明示し、課の終わりで目標の達成度を自己評価させることで、学習者が自身の日本語学習を正しく位置づけ、今後どう学習を進めていけばよいのかについて自覚できるようになり、それが学習意欲の維持につながると考えられる。

課の初めに学習目標が明示されているのは『とびら』『大学生』であり、課の終わりで自己評価をすることが明示されているのは『とびら』であった。

2.4.2 本文

教材を通して、学習者の最終目標である生の文章、すなわち日本語として自然な文章を多種類にわたって読めることは、学習意欲の維持につながる。多種類の本文を扱うことで、様々な文章の型を読む練習ができるため、「読める」という自信が付き、学習意欲を持続させることが可能になるからである。したがって、この2点を満たした本文が入っている『招待』は、第3課題も

達成できるといえる。

以上のことから、学習目標の明示の観点からは『とびら』、本文の観点からは『招待』が第3課題を達成できると考える。

2.5 第4課題「自主的学習への橋渡し」のための教材

第4課題の達成のためには、学習者自身で授業前後の予習復習ができるかが重要である。学生の声から、自分なりの学習方法がつかめていない学習者は、教材の文法説明が少ないことを理由に予習復習をしない傾向があることがわかった。学習者は最初から自律的なわけではなく（小山1996）、教師が文法参考書を紹介してもうまく使いこなせないことも多い。したがって、まずは学習者に「予習できる」という実感を与え、その後少しずつ、自主的に学習を進められるよう促していくのが「橋渡し」であるといえよう。そこで、文法説明と語彙リストがどのように扱われているかを調べた。

2.5.1 文法説明

まず、予習に必要な文法説明がどの程度なされているかを調べた結果、8冊とも意味の説明はあるが、教材によって、説明の難度や詳しさ、使用言語に違いがあることがわかった（表3）。

学習者自身で読める程度の比較的易しい日本語、あるいは媒介言語を使い、接続の形や意味・用法などを詳しく説明しているのは、『招待』『J501』『とびら』であった。その他の教材は、文法説明がそれほど詳しくなく、授業内で教師が説明することが前提となっていると思われる。また、『中級から』は別冊に詳しい意味説明が載っているものの、教師が参照するための説明としての位置づけとなっており（鎌田・他1998）、学習者自身で予習することは難しい。

したがって、文法説明という観点からは『招待』『J501』『とびら』の3冊が第4課題を達成できるといえる。

表3 文法説明の有無

	文化Ⅱ	中級から	招待	J501	ニュー	とびら	学ぼう	大学生
接続の形	×	○(教師用)	○	○	※1△	○	○	×
予習用の意味説明	※2△	○(教師用)	○	○(媒介言語)	※2△	○	※2△	※2△
類似文型・表現との使い分け	×	○(教師用)	○	×	○	○	×	×

※1 接続の形の記載がある文型・表現と、記載がない文型・表現がある

※2 意味説明はあるが、予習できるほどの詳しい説明ではない

2.5.2 語彙リスト

中上級では、本文の語彙量が増え、学習者の中には負担を感じる者もいる。負担をできるだけ軽減し、新出語彙をいかに読解力やコミュニケーション力に結び付けていくかが重要となるため、語彙リストの内容を調べたところ、教材によって掲載情報に違いがあることがわかった（表4）。

語彙リストの情報が多く予習復習がしやすいのは、『中級から』『招待』『ニュー』である。『中

級から』は読み、共起しやすい助詞、漢語情報（スル動詞・ナ形容詞になるか否か）の3項目、『招待』は読み、漢語情報、重要度の3項目、『ニュー』は読み、品詞、漢語情報の3項目が載っていた。

表4 語彙リストの項目

	文化Ⅱ	中級から	招待	J501	ニュー	とびら	学ぼう	大学生
読み	○	○	○	○	○	○	○	※1△
品詞	※2△	×	×	×	○	×	×	×
共起しやすい助詞	×	○	×	×	×	×	×	×
漢語情報	○	○	○	×	○	×	×	×
重要度	×	×	※3○	×	×	×	×	×

※1 難しい語彙のみ、読みが載っている

※2 一部、品詞が明示されている

※3 「話す・書くのに必要な語彙」「聞く・読むのに便利な語彙」に印がつけられている

以上のことから、文法説明と語彙リストの観点から『招待』が第4課題を達成できるといえる。ここまで比較、分析してきた点をまとめると、表5のようになる。

表5 中上級総合教材比較表

		文化Ⅱ	中級から	招待	J501	ニュー	とびら	学ぼう	大学生
第1課題	本文の題材	○			○				
第2課題	構造	○		○			○		○
	本文 ※1			○					
	文法練習						○	○	○
	語彙練習		○		○		○	○	
第3課題	学習目標						○		
	本文 ※2			○					
第4課題	文法説明			○	○		○		
	語彙リスト		○	○		○			

※1 本文の自然さ、本文数、本文の種類

※2 本文の自然さ、本文の種類

2.6 中上級総合教材の開発が必要となった理由

以上、8冊の中上級総合教材について、比較、分析を行った結果、各教材のそれぞれの特徴が鮮明になった。しかし、どの教材が最も優れているとは一概にはいえない。このため、対象となる学習者の特徴・課題などを熟知した上で、適切な教材を選ぶことが望ましいと考える。

SKPでは、1章で述べた4つの課題が達成できるような中上級総合教材を選定する必要があったが、1冊で全ての課題を達成することは難しく、担当教師の判断で、別教材や練習、活動を差し込むなどの対処をしていた。しかし、SKPはティームティーチングの授業であるため、このような対処の仕方はコース全体が煩雑になりやすく、系統立てた日本語教育を提供するという点で限界を感じていた。そこで、本プログラムに参加している学習者に合った中上級総合教材を開発することにした。

3. 4つの課題達成を目指した教材開発

本章では、前章での中上級総合教材の比較、分析を踏まえ、1冊で学習者の課題を達成できることを目標として開発した本教材『日本語中上級総合 きつとうまくいきますよ』について述べる。

3.1 概要

SKPで本教材を使用するのは、中上級レベルである。本レベルは、目安として1) 留学生用加工された文章は読めるが新聞など生の文章を読む力は弱い、2) 身近な話題について標準的な話し方であれば主要点を理解できる、3) 身近で興味のある話題について単調な表現であれば説明できる学習者が対象となる。授業初日にSKP生に示した到達目標は以下の5つである。なお、漢字と語彙のレディネスは、それぞれ500字、3000字程度を想定している。

- ・現実世界の知的な日本語の文章が読めるようになる
- ・専門的な文章が読めるようになるための下地を作る
- ・日本に関する知識・理解を深める
- ・やや高度な文型を習得し、運用できるようになる
- ・漢字（850字程度）、語彙（4,000語程度）を習得する

本教材は、中上級レベルの必修科目である「総合（週5コマ）」「聴解・口頭表現（週2コマ）」「ライティング（週1コマ）」のうち、「総合」での使用を目的として開発した。なお、「総合」は通常3～4人の教師がチームティーチングで行い、1日1コマ（90分）の授業が15週ある。

本教材は、本冊に加え、別冊として『練習問題集（学習者用と教師用各1冊）』『語彙リスト』、個別の配布物として「漢字シート」「語彙シート」からなる。

本冊は、日本文化・社会・異文化理解を目的として5つの分野を選んでそれぞれを章とし、1つの章につき3～4つの本文を配置して切り口の異なる文章が読めるようにした。本教材の第1章のシラバスを表6に示す。

3.2 課題ごとの工夫

3.2.1 第1課題「短期間での日本語能力向上と文化・社会体験」のための工夫：本文中心の教材

1章で述べたように、中上級の各学習者は既習項目に差異がある。このため文法よりも本文を中心とした教材が適していると考えられる。なぜなら、教材に既習文法が含まれていても、第1課題「短期間での2つの目的の達成」ができ、興味を持てる内容であれば、学習者は学習意欲を維持して日本語学習に取り組むことができるからである。そこで、本教材も本文中心の内容で開発した。

本文を選ぶ際、日本語能力の向上と日本での文化・社会体験という学習者の目的の達成の一助となるよう、「ことば」「文化」「歴史」「文学」「現代社会」の5つの章を立てた。また、日本や日本社会について新しい知識を得ながら興味の幅を広げられるか、意見を出しやすいかにも注意を払って本文を選んだ。

3.2.2 第2課題「上達感の獲得」ための工夫：章の構造、活動、文法練習

1章で述べたように、上達感の獲得のためには、学習者自身が運用力の向上を自覚できること

表6『中上級総合 きつとうまくいきますよ』シラバス (第1章)

	題材	節の流れ	コマ	到達目標	教室活動	言語知識や能力
第1章(こぼ)	第1節	あいさつ	2	自分の国との違いや挨拶の機能を説明することができる	・読む：文化による挨拶の違いの文章を理解する [b] ・話す：本文の内容に関して自国との違いを話す [a,c]	・文法「などと言う」「とのことだ」「～得る」[d,e] ・挨拶 ・書き言葉と話し言葉
	第2節	人を励ます言葉	3	略	略	略
	第3節	言葉の力	3	略	略	略
	第4節	話し言葉の接続詞	4.5	略	略	略
	活動	好きな言葉 嫌いな言葉	f. ワークシート g. グループ活動	1	選んだ言葉について意味とエピソードが話せる	・書く：ワークシートに言葉の意味を記入する [f] ・聞く：日本人学生の言葉についての説明を理解する [g] ・話す：選んだ言葉について相手の心情に配慮しながら説明する [g]
小テスト		漢字、語彙、文法、書き言葉・話し言葉	0.5			

※「教室活動」「言語知識や能力」に付した [a]～[g] は、「節の流れ」の a～g に対応している

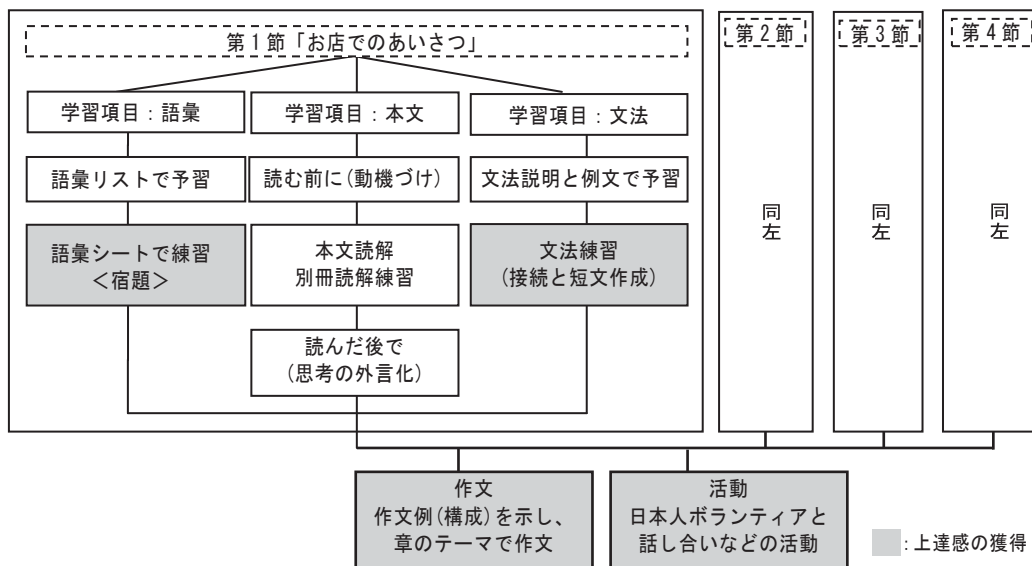


図1『日本語中上級総合 きつとうまくいきますよ』第1章の構造

が必要である。そのために、章の構造（図1）、章の終わりの活動、文法練習の仕方を工夫した。

章の構造については、運用力を伸ばすために、各章の終わりに、その章の学習項目を総合的に運用する作文や活動を組み込んだ統合型で構成した（一部の章は発展型で構成）。

3.2.2.1 活動

1章で述べた本教材開発前の学生の声には「授業はかなり簡単だと思うので、あまり何も習わなかった。授業で文法ばかりしていたので、口頭の能力はあまり上手にならなかった。そして、日本人の友達を作るのは難しかったので、毎日、フランス語や英語ばかり話していた」とあった。SKPのレベル分けは筆記試験の他、面接を行い、さらに日本語担当教師全員での会議で決められており、レベル分けが不適切であったとは考えにくい。しかし、このように否定的な意見が寄せられたのは、授業中に口頭での運用練習が十分でなかったからだと考える。よって、本教材の各章の終わりには、留学生の日本語の授業に興味がある日本人学生を募り、授業に参加してもらえるよう「活動」を配置した。日本人学生を交え、授業内で話し合うことを通して、異文化理解を深めるとともに、一定の長さのある、抽象度の高い話をする力の涵養を目指した。

3.2.2.2 文法練習・作文

上達感の獲得のために、文型・表現、接続表現、副詞（以下「文法」）は段階を踏んだ練習を行い、運用力に結びつけるようにした。まず、新出の文法を本冊で学習したあと、表現力を養うために、『練習問題集』で接続の練習をこなし、自分の考えを書く短文作成につなげた。そして、章の内容を踏まえた作文を産出する流れを作った。このような段階を踏むことで、具体的な話題について短文で書くレベルから、抽象度の高い文章の中で運用ができるレベルに引き上げるようにした。

3.2.3 第3課題「学習意欲の維持」のための工夫：学習目標の明確化、本文

2章で述べたように、学習意欲の維持のために、学習目標を明確化する活動を入れ、本文の自然さ・数・種類にも留意した。

3.2.3.1 学習目標の明確化

2章で述べたように学習目標を明確にすることやその目標を達成することが学習意欲の維持につながっていくと考える。そのため、学期初めに目標を記入させ、表紙のだるまのイラストに願掛けとして片目を入れさせた。そして、学期末に学習目標が達成できていれば他方の目を書き入れるという活動を行った。

3.2.3.2 本文の自然さ・数・種類

まず、本文の自然さについては、ほとんどの本文は生の文章ほど難しくなく、かつ書き下ろしほど易しくならないように配慮し、リライトを行った（生5、リライト12、書き下ろし2）。本冊の前半は生の要素を残しながらも、内容が易しくなりすぎないように注意してリライトしたが、後半の章ではできるだけ生の文章をそのまま載せるようにした。そうすることによって、日本語で書かれた一般の文章が自分で読めるという自信につながり、第4課題達成にもつながると考えたためである。

次に、本文数については、少なすぎると学習者が「新しいことをたくさん学んだ」という実感を得られず、学習意欲をなくす恐れがあることから、2章で比較した中上級総合教材8冊の本文数平均12.8より多い、19の本文数とした。

また、多様な文章の型を読むことによって自信をつけ、学習意欲が維持できるように、説明文8、意見文4、記録報告文2、エッセイ2、小説・物語文2、詩1の6種類からなる本文を選んだ。さらに、本文の内容に配慮し、1)日本人に親しまれている文章(例.耳なし芳一)、2)学習者に内省のきっかけを与える文章(例.地球温暖化)、3)経験知を専門知へと転換させる文章(例.パーソナルスペース)などを入れた。

3.2.4 第4課題「自主的学習への橋渡し」のための工夫：文法説明、語彙リスト

3.2.4.1 文法説明

短期間で効率よく新しい文法を学び、運用力をつけることを目指した。なお、文法は日本語能力試験の旧2級⁵⁾を中心に選定した。

自主的学習への橋渡しにつなげるため、学習者が予習復習をしやすいうように、本冊に接続と詳しい意味説明を入れた。これらは、学習者が理解できる日本語で示すように心がけた。また、例文に抽象度の高い語彙や高文脈の語彙を使用せず、学習者が文法理解に集中できるように配慮した。このねらいは、学習者の自主的学習を促し、SKP修了後も日本語で書かれた文法書があれば教師の説明なしに一人で勉強することができるという自信につなげることである。

3.2.4.2 語彙リスト

語彙は少ないが知的好奇心が高い学習者に合わせて、身近な話題から専門性の高い内容まで幅広く選んだ本文から、様々な語彙を学べるようにした。

自主的学習への橋渡しにつなげるため、別冊『語彙リスト』には、読み方、品詞、重要度を示した。意味は敢えて載せずに記入用の余白を設け、そこに学習者自身で記入できるようにした。重要度は、1)知っているべき語、2)覚えるべき語、3)現段階では覚えなくていい語の3段階で明記することで、学習者が現段階で何を学ぶべきかがわかるようにした。そして、運用につなげやすいように、スル動詞(例.勉強する、表現する)になる漢語名詞には「名・する」とし、ナ形容詞(例.不正な、健全な)になる漢語名詞には「名・な」と表示した。

3.3 本冊の全体像

開発した本冊の全体像を下に示した(図2)。図の中の①～④の番号は、第1課題から第4課題のうち、どの課題が達成できたかを示している。

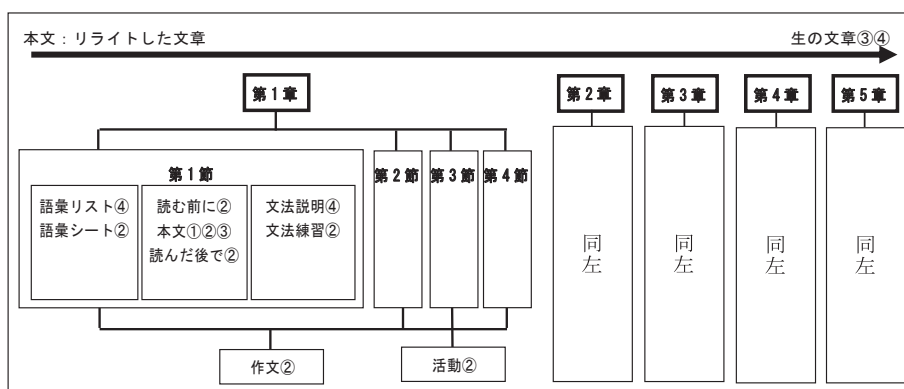


図2 『日本語中上級総合 きつとうまくいきますよ』全体の構造と課題達成箇所

4. 教材の評価と改訂

前章では本教材の開発について述べた。学習者の4つの課題を1冊の教材で達成することに概ね近づけることができたのではないかと考える。しかし、教材開発は、ガニエ・他（2007）が述べているように、「学習者集団からのフィードバックを得て改善を加えることで、より効果的になる」（p.4）。そのため、本教材は初版開発後も学期末に毎回改訂を行い、現在（2011年度後期）は第5版を使用している。改訂にあたり、学習者と教師からのフィードバックを参考資料とした。アンケート調査で量的データを収集し、インタビュー調査や教師間の意見交換などから質的データを収集した。本章ではこれらの参考資料を基に行った改訂について述べる。

4.1 フィードバック（教材への評価方法）

本教材に対する学習者側からの評価を得るため、学期末にSKP生を対象とした2種類のアンケート調査とインタビュー調査を実施した（表7）。

表7 SKP生へのアンケート調査とインタビュー調査の概要

本教材の版	初版	第2版	第3版	第4版	第5版
調査年度／学期／月	09/後期/1月	10/前期/7月	10/後期/1月	11/前期/7月	11/後期/1月
解答者数／受講者数	15/15	9/9	13/15	11/11	8/8
好悪度調査	○	○	○	○	○
満足度調査	×	×	×	○	○
インタビュー方法	非構造化※	非構造化※	非構造化※	半構造化	半構造化

※インタビュー自体は半構造化であるが、教材については非構造化で行った

アンケート調査では、本教材に掲載した本文について「来学期もしたほうがいい？」という問いを立て、「いいえ・どちらでも・はい」の3件法で回答を求めた。集計の際には「いいえ」を1点、「どちらでも」を2点、「はい」を3点に置き換えて算出した（以下「好悪度」）。また、アンケート用紙には各本文への自由記述欄として「コメント（あったら）」を設けた（以下「好悪度調査」）。2011年度前・後期末には、本文以外（教材の満足度、文法〔難度・量〕、本文前後の話す活動〔是非・量〕など）の項目についてより具体的な評価を得るため、「授業・教材満足度調査」（以下「満足度調査」）を実施した。満足度調査では、上記の項目について5件法で評価を記入するものである。これらの調査を実施したのは、本文や文法などの評価を点数化することで学習者の教材に対する満足度を客観的にみることができると考えたからである。

上記のアンケート調査の他、初版から第3版の使用後には、学習者への学習アドバイスを目的とした個人面談で本教材に対する学習者から意見や感想を聞いた（以下「非構造化インタビュー」）。第4版・第5版使用後には本教材の評価についてより具体的にそれらの情報を得るため半構造化インタビュー形式で行った（以下「半構造化インタビュー」）。

さらに、教師からの評価を得るため、毎学期末に本教材を使用した教師で集まり、使いにくかったところや改善への提案を収集した。また、教師が授業や試験などで気づいたことを適宜記録できるように、講師控室に本教材を置き、改訂時の参考資料とした（以下「教師の気づき」）。

4.2 課題達成

上述したフィードバックから、初版で概ね4つの課題が達成されていることがわかった。

本文への好悪度調査（2009年度後期）では、全体の平均値が3件法で2.31と比較的高い値であることから、第1課題を達成できたといえる（表8）。

学習者への非構造化インタビュー（2009年度後期）から「日本人と話すことが前より恥ずかしくなくなった」「習った語彙が使えるようになった」など、上達感に関する感想が聞かれ、第2課題が達成できていることがわかった。

また初版の好悪度調査（2009年度後期）を章別でみると、第4章の文学の平均値が2.47と最も高く、次いで第5章の現代社会が2.40であった。本冊の後半の章であるこれらの値が高いことから、全体的に第3課題「学習意欲の維持」に成功すると同時に第1課題「短期間での2つの目的（日本語能力の向上と日本での文化・社会体験）の達成」の一助になったと考えられる。第3課題については、教師の意見交換の中でも1学期間、ほとんどの学習者が意欲的に取り組んでいたとの報告があった。「日本でたくさん小説を買ったので読みたい」、「教材を復習するつもり」（2009年度後期非構造化インタビュー）などの意見や感想が聞かれたことや、本文を読む前にほとんどの学習者が語彙リストを使って予習をするようになったという教師の報告から、本教材が第3課題「学習意欲の維持」と第4課題「自主的学習への橋渡し」の達成もできていると考えられる、つまり、本教材は概ね4つの課題が達成できているといえる。

表8 初版から第5版本文の好悪度平均値（3件法）

	初版	第2版	第3版	第4版	第5版	各章全体
使用年度／学期	09／後期	10／前期	10／後期	11／前期	11／後期	—
第1章「ことば」	2.13	2.56	2.50	2.54	2.53	2.45
第2章「文化」	2.28	2.44	2.46	2.60	2.46	2.45
第3章「歴史」	2.29	2.72	2.46	2.76	2.58	2.56
第4章「文学」	2.47	2.78	2.56	2.74	2.81	2.67
第5章「現代社会」	2.40	2.69	2.54	2.72	2.46	2.56
全体	2.31	2.64	2.50	2.67	2.57	

※全体の値は、各平均値の和を章数、版数で割ったものである

4.3 課題達成が不十分な点とその改訂と再評価

4.1では、本教材が4つの課題を概ね達成できたことについて述べたが、フィードバックから達成が不十分だと思われるところもいくつか見られた。また、教師の気づきからより課題達成を強化するための改訂案が出た。それらを基に改訂し、さらにそれに対する再評価を行った。

4.3.1 本文

初版教材への好悪度調査で値が低い本文があった。初版の中に入れた「色の力は適材適所」という色の膨張性についての文章は1.93と低く、自由記述欄には「too boring」「いらぬ言葉が多かった」というコメントがあったことから第3課題が達成できていない本文であったと考える。この本文は日本文化理解に関する内容も含まれていたが、第一段落に難解な語彙（例、収縮膨張性、波長、暖色系など）が並び、馴染みが薄い専門的な内容であったため、興味を持ちにくかつ

たようである。好悪度は、本文の難易度ではなく、学習者が興味を持ち学習意欲を維持して読解に取り組めるかどうかによって左右される。例えば、歴史の章は、専門的な語彙が多く難易度の高い本文が入っているが、初版～第5版までの好悪度平均が2.56と、低い値ではなかった(表8)。そこで、アプローチを変えれば多少難しい内容でも学習意欲を維持して読解に取り組むと考え、文化による色の表現の差についての文章に差し替えた。その結果、差し替えた本文を再評価したところ、好悪度の値は2.56に上がった。つまり、改訂が妥当であったといえる。

なお、表8から明らかのように、2009年度後期から2011年度後期を通してみると、期待に反して教材全体の好悪度は一貫した上昇の傾向をみせていない。しかし、前期と後期を分けて表を見ると、それぞれ上昇の傾向があるといえる。前期には、前年度後期からの継続生が多いため、留学生生活は安定しており、各自の勉強方法を確立し、また、日本語での授業にも慣れている。しかし、後期には新規生が多く、留学生生活が不安定な状態で、勉強方法が確立しておらず、日本語だけの授業に戸惑いを見せるSKP生が多い。このように、前期と後期で学習者のタイプが異なることが、好悪度に影響したと考える。

4.3.2 話し合う活動

初版では思考を深めるため意図的に「本文を読む前に」と「話し合おう」で似た質問を出している節もあったが、非構造化インタビュー(2009年度後期)で「同じことを繰り返して聞かれて無意味だと思う」という意見が学習者からあった。また、教師の気づきや意見交換の中で、「初版開発時に教師同士で複数回にわたって質問項目を確認したが、実際に授業を行ってみると思考の深化につながらないものがあつた」という報告があり、第3課題の達成が不十分であることがわかつた。そこで第3課題達成のために、本文前後の話し合う活動の改訂を行った。改訂するにあたり、1) 質問間につながりを持たせることで思考の深化を促し、2) 具体例を挙げることで議論の活発化を図るようにした。

上記の改訂を再評価するため、2011年度の前・後期末に満足度調査で「本文前後の話し合いが役に立ったか」を5件法で評価させたところ、平均がそれぞれ3.8、3.0という結果を得た。前期の学習者にとってある程度満足できる活動になったようであるが、後期に関しては「どちらともいえない」という結果となっている。しかし、教師の意見交換でもより具体的な話し合いに発展したなどの報告があつたことから、この改訂は一定の効果はあつたといえる。

4.3.3 文法説明

日本滞在歴が長い学習者は、生活の中の豊富なインプットが文法などを身につける際に有効な資源となるが、滞在期間に限られている学習者はなかなかそこまでの時間がないのが現状である。つまり、第1課題「短期間での2つの目的(日本語能力向上と日本文化・社会体験)の達成」と第2課題「上達感の獲得」強化のために、教材により丁寧な文法説明が求められるといえよう。これについては、教師の気づきの記録を基に、主に次の4つの改訂を行った。



一つ目は学習者が間違えやすい項目に非文例を入れ、注意を促すことである。例えば、「わけにはいかない」という文法説明には「心理的・社会的・人間関係的な理由があつてXをすることができない」という説明を付していたが、試験に出題した「～ので、～わけにはいかない」という短文完成問題で「今日は夜遅くまで遊んでいたの、明日は早く起きるわけにはいかない」という誤答をした学習者がいたので、この文を非文として文法説明に掲載し、産出の際に注意を

促すようにした。

二つ目は似ている文型の使い分けの説明文や表、そして例文を示すことである（図3の下部の太枠部分が加筆部分）。これは、学習者からの質問や試験での誤答を参考にして追記した。

三つ目は一般的にひらがなで表記される文法や副詞の漢字表記を明記したことである（例、～がち [勝ち]、まさに [正に]）。これは、元の漢字から意味を推測することが期待でき、また、他の文章で漢字表記されていても理解できるようになると考えたためである。

四つ目は学習者が文脈に合わせて使うことができるようになることを期し、見出しの横にスーツの絵とTシャツの絵を付してフォーマルな場とカジュアルな場のそれぞれで使用できるか否かを示した。これらの改訂への再評価としては、半構造化インタビュー（2011年度前期）で「似ている文法の表が役に立った」との意見があることからより第1課題と第2課題達成の強化につながったといえる。

1. ～がち [勝ち]  

ただ、後ろ向きな思考がうつ病などにつながりがちだということは、多くの精神科医が語っている。

意味:「そうなりやすい傾向がある」「そうなる頻度が高い」という意味を表す。マイナス評価を受ける状態に使うことが多い。

接続: **動詞**-ます形 + がちだ
名詞 + がちだ

① 彼は最近体調を崩して、大学の授業を休みがちだ。
② <天気予報>明日はくもりがちで、ところによっては雨が降るでしょう。
③ 悲観的な気持ちになっているときは、人を傷つけることを言いがちだ。
④ 雨が降ると、バスは遅れがちになる。
⑤ 雨のち晴れの日は電車で傘を忘れがち {な・の} 人が多いので、気をつけましょう。

※「～がちだ」と「～やすい」の使い分け

	接続	意味	例
がちだ	名詞 動詞	①N・Vの状態になる頻度が高い ※マイナス評価になることが多い	・日本に来てから病気がちだ。 ・梅雨の季節は気持ちが沈みがちだ。
やすい	動詞	①Vが簡単にできる ②Vが起り得る性質を持っている ※反対の意を表すときは「～にくい」	・彼女の歌は覚えやすい。 ・そのおもちゃは壊れやすい。 ・太りやすいので、気をつけている。

⑥ この本は難しい漢字を使っていないので、読み {×がちだ・○やすい}。
⑦ カフェに入ると、甘い物を選んでしまい {○がちだ・×やすい} ので、カフェに行かないことにした。

図3 文法の改訂例

4.3.4 語彙リスト

中上級の学習者は日常会話に困らない程度に話すことができるため、語彙を増やすという負担を避けがちになり、結果として、いつになっても抽象的な話や掘り下げた話ができるようになら

ず、上達しているという実感が得られない場合が多い。そのため、語彙の運用力をつけるための改訂が必要であると判断し、教師の気づきを参考にしてみた。

理解語彙が使用語彙となることは、第2課題「上達感の獲得」の一助となる。そこで、1) 動詞には先行しやすい助詞と自他の区別を、2) 擬音語・擬態語には後続の形を示した。また、3) 対義語や派生語も極力示し、語彙力の涵養を図った。さらに、4) 固有名詞にはそれを明記し、学習者が所有する辞書の見出し語にはなっていない可能性の高い語には説明を付した。

語彙リストの改訂への再評価については、半構造化インタビュー（2011年度前期）で「助詞があって作文のときに便利だった」「対義語が入っていて役に立った」など肯定的な意見が出たことから、適切であったといえる。また、「パソコンソフトを使ってフラッシュカードを作って毎日勉強した」「どこかに行く時に語彙リストを持ち歩いた」などの意見があり、第4課題達成強化にもつながったことがわかった。

語彙リストで扱った語彙は、できるだけ文法の例文に入れるように、また、本文間でも不自然にならない程度に同じ語彙を複数回入れるように改訂した。再評価のために半構造化インタビュー（2011年度後期）を行ったところ、「語彙が繰り返して出てくるので、覚えられた。長い文章でも前よりも辞書を引く回数が少なくなり感動した」という感想が聞かれ、上達感を得る一助となったと考える。

4.4 改訂の妥当性

筆者らは、学習者の特徴から4つの課題を明らかにし、それらを達成することを目指した教材を開発した。学習者が満足できる教材を開発するためには、教材使用者（学習者と教師）による評価とそれを基にした改訂が非常に重要である。

本教材では、量的データ（学習者への好悪度調査と満足度調査）と質的データ（インタビュー調査、教師の気づきなど）の分析や教師間での意見交換を基に改訂を行い、さらに、改訂の妥当性を再評価した。その結果、2011年度前・後期の教材満足度調査では共に4.4/5を得ることができ、学習者の興味・関心を喚起しつつ、学習意欲を維持したまま学期を終了することができた。

以上のことから、学習者特有の4つの課題の達成を目標とした教材開発・評価、改訂が妥当であったといえる。

5. おわりに

本稿では、まず、短期留学生特有の4つの課題、1) 短期間での2つの目的（日本語能力の向上と日本文化・社会体験）の達成、2) 上達感の獲得、3) 学習意欲の維持、4) 自主的学習への橋渡しを指摘し、次に課題達成のために必要となる項目を中上級の学習者を対象とした教材の分析によって明らかにした。さらに、筆者らが教材を開発した過程と、評価を基にした改訂について述べた。

課題達成を目指して開発した本教材の初版は、授業後の好悪度調査、満足度調査、インタビュー調査から4つの課題が概ね達成されていることが判明した。さらに4つの課題の達成度を上げるべく、改訂を行った。本教材開発の改訂の際に参考にしたデータのうち、量的データは複

数回にわたって収集することで、SKP 生の満足度に関する傾向が把握できた。そして、その傾向について、質的データから SKP 生の満足度にかかわる要因を詳細に分析し、課題達成度を上げることができた。これら 2 種類のデータの収集によって教材の評価が妥当に行えたと考える。

今後の課題は、学習者に合わせて本教材が使用できるような工夫をすることである。特に、中上級の中でも下のレベルの学習者からは、本文が難しい、文法説明が詳しすぎる、語彙リストの語の数が多いなどの声も上がっているため、各本文に難度を提示すること、文法説明や語彙の提示の仕方を工夫することを今後の課題としたい。この改訂により、前期に比べて好悪度が下がる傾向にある後期の学習者にも対応しやすくなると考える。また、本論では言及しなかったが、学生が上達感を得られるようにするため、第 5 版では東京外国語大学留学生日本語教育センター(2011)が作成した「JLC 日本語スタンダード」を基に SKP 生用に作成した can-do リストを本冊に掲載した。このリストが学習者の上達感の獲得にどのような影響を及ぼしたのかについての調査も今後の課題としたい。

付記

本稿は第 37 回日本語教育方法研究会(2011 年 9 月)での発表に大幅な加筆修正を行ったものである。

注

- 1) Instructional Systems Design とは、分析、設計、開発、実施、評価による包括的な教育システム開発のプロセスを指す。(ガニエ・他 2007 p.21)
- 2) 『J501』は各課の終わりに話す活動や書く活動があるが、課の学習項目を使った総合練習や課の内容に関連した教材を使った発展練習ではない。
- 3) 本稿では、本文の後に「～より」と引用・参考元が記載されているものを「リライト」と判断した。また、本文の後に「～にもとづく」「～参考」など参考資料をもとに書かれたことが明示されているものや、参考資料が載っていないものを「書き下ろし」と判断した。
- 4) 本稿では、記者が当事者へのインタビューを通して実態を記録した文章のことを「記録報告文」と呼ぶ。
- 5) 新試験は出題基準が非公開であるため、旧試験の出題基準を利用した。

参考文献

- ガニエ, R. M.・ウェイジャー, W. W.・ゴラス, K. C.・ケラー, J. M. 著、鈴木克明・岩崎信監訳『インストラクショナルデザインの原理』北大路書房、2007 年。
- 国際交流基金『国際交流基金 日本語教授法シリーズ 第 14 巻「教材開発」』ひつじ書房、2008 年。
- 国際交流基金『国際交流基金 日本語教授法シリーズ 第 10 巻「中・上級を教える」』ひつじ書房、2011 年。
- 国際交流基金・日本国際教育協会『日本語能力試験出題基準』凡人社、1994 年。
- 小山悟「自律学習促進の一助としての自己評価」『日本語教育』88 号、1996 年、91-103 頁。
- 孫毅權・山本広志「短期留学生の日本語能力に関する自己上達感—台湾人留学生の場合—」『山形大学紀要(教育科学)』第 14 巻第 4 号、2009 年、41-56 頁。
- 東京外国語大学留学生日本語教育センター「JLC 日本語スタンダード 2011 改訂版」2011 年、

(<http://www.tufs.ac.jp/common/jlc/jlc-gp/doc/standards-j.pdf>, 2012年1月30日)

富坂谷子「自己評価のメタ認知ストラテジー—留学生面接調査の結果分析から—」『言語と文化』11号、2007年、139-151頁。

日本語教材リスト編集委員会『日本語教材リスト 2010-2011』No.40、凡人社、2010年。

長谷川千秋・奥村圭子「短期留学生の大学生活についての意識調査—短期交換留学生は大学に何を求めているか—」『山梨大学留学生センター紀要』3、2007年、12-31頁。

黛道子・神田みなみ・畑中貴美「易しい教材の効果的な使用方法を実践の中で考察する—3大学における英語多読授業を通して—」『医療看護研究』第2巻1号、2006年、116-123頁。

横田雅弘・他「平成19年度文部科学省先導的の大学改革推進経費による委託研究 年間を通した外国人受け入れの実態調査」(http://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/itaku/08090305/008/001.pdf 2011年10月30日)

調査した教科書

鎌田修・相本総子・富山佳子・宮谷敦美・山本真知子『中級から上級への日本語』The Japan Times、1998年。

小柳昇『ニューアプローチ中上級日本語 (完成編)』日本語研究社、2002年。

近藤安月子・丸山千歌編『中・上級日本語教科書 日本への招待』東京大学出版会、2001年。

堤良一・長谷川哲子『「大学生」になるための日本語2』ひつじ書房、2010年。

土岐哲・関正昭・平高史也・新内康子・石沢弘子『日本語中級J501—中級から上級へ—』スリーエーネットワーク、2001年。

平井悦子・三輪さち子『中級を学ぼう 日本語の文型と表現 82』スリーエーネットワーク、2009年。

文化外国語専門学校編『文化中級日本語Ⅱ』凡人社、1997年。

立命館アジア太平洋大学『日本語5つのとびら—中上級編』凡人社、2008年。

The Development and Revision of the Pre-advanced Comprehensive Japanese Textbook—To satisfy the needs of short-term exchange students—

NAITO Mariko (Lecturer, Ritsumeikan International, Ritsumeikan University)

KOMORI Mari (Part-time Lecturer, Center for Japanese Language and Culture, Osaka University)

TAKAHASHI Junko (Part-time Lecturer, College of International Relations, Ritsumeikan University)

TSUJI Keiko (Part-time Lecturer, College of International Relations, Ritsumeikan University)

Abstract

Ritsumeikan University has a program for accepting short-term students from abroad. These students have the following four needs : 1) to improve Japanese proficiency and to experience Japanese culture and society in a finite period of time, 2) to gain the actual feeling of being proficient, 3) to maintain motivation, 4) to develop the ability to study independently.

In this paper, we examined the 8 commercially available pre-advanced comprehensive Japanese textbooks whether they satisfy the short-term students' needs. After that, we developed a textbook for our students, and revised it four times utilizing quantitative data (e.g. class feedback) and qualitative data (e.g. the impressions of the instructors). These data proved that our first edition satisfied those needs mostly. Furthermore, in order to enhance the level of satisfaction, we repeated revision and evaluation based on these data. As a result, we succeeded in developing an effective textbook which heightens the students' satisfaction.

Key Word

Japanese, short-term exchange students, pre-advanced, textbook analysis, textbook development, quantitative data, qualitative data, revision